

要書類（兵籍名簿等を含めて）ともども、潜水艦や空爆で沈没させられ海の藻屑となり、永遠に不明となつてしまったことは事実である。これがため不利益を被っている人は三百万人を超しているかもしれぬ。

私は、残務整理を一週間手伝ったが、自宅は焼けず、家族は無事であった。しかし、弟達二人は海軍に入り、二人とも戦死してしまったから、戦没者遺家族でもある。その後は、農業に復帰した。

私の満州行脚と外蒙古抑留

佐賀県 藤井繁治

昭和十二（一九三七）年、日支事変が勃発し、私達は毎日のように小学生ながら駅頭まで出征兵士を見送りに行ったものである。そしてまた、昭和十六年十二月八日、大東亜戦争が勃発と同時に世間の緊張は高まり、食料品は配給となり、農家は食糧増産で人手が足りず、米麦の収穫時には学生ながら、よく勤勞奉仕で

農家へ手伝いに行ったものである。

戦争はますます激しくなり、学校教練はもとより、兵営宿泊（三泊四日）、県下の連合演習、昭和十七年には福岡・佐賀・長崎三県連合演習と規模が大きくなり、佐賀・福岡の県境で白兵戦をしたことを思い出す。そして学校では、三月卒業を繰り上げて十二月卒業であった。

私がかねてより「青年よ行け大陸へ行き、広野を拓け」に憧れて、卒業後一カ月しての昭和十八年一月二十九日（私の誕生日）ちょうど十八歳となり、かねて就職が決定していたが、満州国興農合作社へ入社のため渡満することとなった。

小船で関門海峡を渡り下関駅へ、全国から三百人ぐらいが集合し、集団となり関釜連絡船に乗り込む。当時、既に敵潜水艦が内地付近にも出没するというので、魚雷襲撃に備え全員救命袋を渡されたことを思い出す。

夜十時頃、下関港を出発し、翌朝無事釜山に上陸することができた。それから、朝鮮半島を縦断し、満州

国旧奉天駅にて乗り換えたが、今でも思い出すことだが、おそらく零下三十度ぐらいあったろう。「何で、こんな寒いところへ希望に燃えて来てしまったのだから」と思った。そしてアジアで一番速い汽車に乗り瀋陽（旧奉天）より長春（旧新京）の興農合作社へ到着した。

約一週間、基礎教育のため新京に滞在したのだが、その間、宿舎まであの大同大街という広い大きな道路を通り、幾つもの大きなビルディングを見ながら、「すべてが大陸的だなあ」と思った。

その後、各人の希望で、農事・畜産・その他いろいろの分野に分かれ、技術員としての六カ月間の教育訓練を受けるのである。私は畜産希望であったので、南満の瓦房店へ行き、満州養鶏振興株式会社という満州随一の養鶏場で、訓練生として二月より八月まで、育雛より成鶏になるまで、また伝染病のこと等、これから満州の農民へ養鶏を普及させるための勉強であった。

訓練生はちょうど十人である。五十六年も前のこと

であるが、時々いろいろのことを思い出す。社長は日比野兼男さん（愛知県）、そして市来場長（鹿兒島県）、鳥羽三郎（經理担当・長野県）、原田技司、村上訓練生指導員（熊本県）等、また仲間の訓練生は井上（高知県）、高橋（千葉県）、石渡（千葉県）、山田（静岡県）、石川（静岡県）、岩見（愛媛県）、佐野（長野県）、内堀（埼玉県）、中山（大分県）、小生の、丁度十人であった。

それぞれの者は、出身県こそ違いが、今思えば一致団結というか、何事も協力しあって励んだものである。県によってなまり言葉というか方言で言われると解釈に困った。千葉弁は「ペアー」とか、静岡県あたりの言葉は最後に「ヅラー」が付いたりするので佐賀県出身の私には困ったものである。

また反対に、九州の人は言葉が荒いため、「喧嘩でもしているように見えた」とよく言われたものである。しかし反面、今でこそおかしいかもしれぬが、よく「九州男児か」と言われたことなどを思い出す。そして村上訓練生指導員が、口癖のように「ラシク」と

「男は男らしく」「女は女らしく」と言われたことなど、今でも思い出すことが多い。

そして一通りの訓練を終え、思い出に残る修学旅行で、日露戦争において乃木將軍が最大の苦戦をされ、勝利をあげられた旅順の二〇三高地を最初に見学した。話によれば幾万の犠牲者を出されたと聞いているが、実際に現地を見て驚いた。トーチカより狙い撃ちされ多数の犠牲者を出したろうと思う現場であった。

旅順港を眼下に見れば広瀬中佐のことが思い出された。また、両戦跡巡りの添乗員は男性で力強い説明であったなど、当時の記念写真を見るにつけ思い出す。また、歌にある乃木將軍とステッセル將軍会見のあった「庭に一本棗の木」があったことも思い出す。

戦跡見学を終え、大連より、当時東洋一の高速列車、特急「アジア号」にて国際都市ハルビンへ行ったが、ロシア人の多いのに驚かされた。夜ともなれば松花江湖畔は、あの当時日本では考えられない賑わいがあったことが走馬灯のように思い出される。

旅行を終え、いよいよ興農合作社の一職員として四平省梨樹県興農合作社へ着任した。現地では先輩に從い、毎日のように穀物、野菜の出荷督励の総てが軍より要求されていた。一週間ぐらい泊まりづめで帰って来ることなど、しばしば続いた。また農村へ行けば、大人が見えたと言って、村長さんの家に宿泊させてくれ、自分たちは高粱食なのに我々日本人には保存していた白米をよく食べさせてくれ、内心申し訳ないと思ったことがあった。

昭和十九年五月、徴兵検査が現地であり、甲種合格となり、同年十一月、承德（映画「熱砂の誓い」のロケ地）へ入隊した。一週間後、満支国境警備のため万里長城にあった馬蘭口という地へ、承德より三泊四日の行軍で行ったが、兵舎とは名ばかりの、民家を改造した所であった。ここは敵地と同じで、共産八路軍がいつ出没するか判らぬ所である。そのため巻脚絆を巻いたまま就寝したときも度々であった。そして、いつ襲撃されるか判らぬため実弾を持って演習に出るのが

常であった。特に夜間演習には気を配って行ったものである。

初年兵の一期の検閲を終了したら、討伐にも度々出動した。私が今でも深く心に焼きついているのは、昭和二十年八月七日、日本では七夕祭りの日であった。山岳を討伐のため行軍していたところ、左前方五十メートルぐらいの中腹より敵軽機関銃が火を噴いた。びっくりした分隊長の「伏せろ」の声で伏せたが、古参兵は慣れたもので「弾は高い」と言って前進して行つたが、我々初年兵は初めての戦闘であり、ただ驚きと、恐さだけであった。しかし、その戦闘で三人の死者が出たことは今でも忘れられない。何しろ、終戦一週間前のことであるから。

十日後の昭和二十年八月十七日だったと思うが、熱河省承德で終戦を迎えた。戦いに敗れ捕虜の身となり、武装解除された時の悔しかったことは今でも忘れられない。菊の紋章の入った三八式歩兵銃を没収される時など、国家に濟まない気持ちでいっぱいであった。

その後二週間ぐらいは、毎日のように使役で、糧秣の積み込みその他、いろいろな仕事に使われた。彼等が一番欲しかったのは時計と万年筆であったが、彼等には珍しい貴重な物だったのだと思う。

九月上旬、貨車にて出発となったが、有蓋車、無蓋車とあったが、私は幸い有蓋車に乗り込むことが出来た。もうこの時期になると夜は零下の温度となるから無蓋車の人はさぞ寒かったことと思う。出発する時、ロシア軍人は「ヤボンスキー、東京ダモイ、皆安心してください、皆様を無事日本に送ります」とのことであつたので、皆安心していた。

しかし、我々を乗せた貨車は奉天―新京―ハルビン―黒河と進み、黒龍江は凍っていて歩いて渡った。そして対岸はブラゴエ(ソ連領)である。その間下車を許したのは何回かであった。そのうち我々はだんだんと不安となつてきて、本当に日本に帰れるのかと疑うようになってきた。

輸送の間、逃亡者が出るのを防ぐためか、なかなか下車させてくれない。その後、走り出すと三日間ぐら

い走り続ける。停車する時は三日ぐらい停車するが警戒はますます嚴重になっていく。一番困ったのは用便であった。そして、ブラゴエ（ソ連領）よりいよいよシベリア鉄道に入る。それでも「日本に帰す」と言っていることを信じていた。

しかし、さすがにバイカル湖が見えた時は「もう駄目だ」と思い、諦めたのである。「裏切られた無念と失望」の気持ちは皆持ったであろう。

我々はようやくバイカル湖付近の駅に下車させられ、四キロほど歩かされた。翌朝トラックに乗せられ、大草原を猛スピードで走り、目的地も知らされず夕方外蒙古の首都ウランバートルへ着いた。

一日休養を与えられ、いよいよ翌日より農場の仕事である。ちょうど燕麦、馬鈴薯の収穫時期であったので、朝六時起床、現場まで四キロぐらい、七時仕事開始。ノルマに縛られるが、十一月ともなれば相当寒い。太陽の昇る時など零下二十度ぐらいだったと思う。

我々が一番困ったのは、満州からの約五十日貨車に

乗せられ座りっぱなし故、足が弱ってしまった。その上食糧が十分でなく、作業場に着いたら早速ノルマに縛られる。朝食は飯盒の蓋一杯の粥に少し硬い飯、副食無し、飯の中にキャベツと何か判らないような肉が入っていたことを思い出す。

このような食事不足であるのにノルマは済ませないと絶対に帰してくれない。そのため我々は、農場の馬鈴薯をズボンの下を縛って入れ、警備兵の目を盗んで宿舎に帰って、飯盒で茹でて食べ、体に気をつけたものである。

また満州から持ってきた高粱・小豆・大豆は我々抑留者の食であったが、一番困ったのは小豆を飯代わりに二十日間ぐらい食べさせられ下痢、栄養失調となり、体力が落ちてしまったことであった。

このような苦勞をしながら一年目の冬を何とか凌ぐことが出来た。その後の労働は道路工事、アパート建設、マンホール造り、煉瓦工場の仕事等、いろいろな仕事をさせられ、転々としたが、総てノルマがあり、風邪でも体温が四〇度以上ないと休ませてもらえない

い、かといって薬があるわけでもない。神経痛では休ませてくれぬ、「ソ連にはそんな病気は無い」というのである。従って現場まで足を引きずっても行かねばならなかった。

休日は二回ぐらい、入浴は月一回である。少し暖かくなると「帰国のデマ」がどこからともなく飛んで来たものである。「四月節」「六月節」「十月節」と。しかしウラジオ、ナホトカの港が結氷するようになれば、そのような帰国節は自然と消えていった。そして休憩時は必ずといっていいほど、食べる話ばかりである。「日本へ帰ったら、おはぎを腹いっぱい食べたい」とか「故郷の名物の何々を腹いっぱい食べたい」とか、しかし、最後は必ずと言ってよいほど全員が「もう一度日本（故郷）に帰りたい」ということであった。

私は抑留地で亡くなった戦友を何度か埋めに行ったが、あれだけ「もう一度日本に帰りたい」と言っていた戦友は、さぞ残念だったであろうと思う。やはり祖

国の有り難さは、故郷日本を離れて初めて判ると思ふ。

作曲者故吉田正自身も抑留体験者であるが、私は時々カセットCD等で「異国の丘」とか「岸壁の母」とか「モンテンルパの夜は更けて」等を聞いていると感傷的になり、時には涙すら流すときもある。歌の中に「祖国」「母」「日本の土」とかあるのは、総て故郷を愛するが故だと思ふ。

私は戦後、職場旅行で山口県萩市の松陰神社へ参詣したとき「親を思う心に勝る親心、今日の訪れ何と云くらん」と書いてあったのを見たとき、私の抑留中、親はこのような気持ちで待っていてくれたと思う。その母も私が抑留生活より帰って一年数カ月で亡くなってしまった。音信不通で心配をかけた分、これから孝行したかったのにと思ひ、この時ほど心を痛めたことはなかった。

今思えば、人生八十年の時代なのに四十九歳の若さであった。いろいろ抑留生活を振り返ると、私自身の人生の中で、通常の生活では到底味わうことの出来ぬ

貴い経験であった。私は、抑留生活でただ一つ得たものは、苦境に立っても耐え抜くということだけである。

私は、何としても祖国の土に辿りつきたかった、日本の土を踏みたかった。亡き戦友の分まで働いて人生を終わろうと思いつながら毎日を送っている。

しかし、戦争の恐怖や悲惨さ、戦後の今日になっても未だ癒えることない深い傷跡だけが残る悲しみを、身をもって体験している私は、「平和の尊さ」、これを守ることの重大さの認識が体に染みついて一人であると思っている。

また、絶対忘れてはならないことは、祖国のために尽くして、なお祖国に帰られなかった戦友たちの上に、今日の平和があるのだということであると思う。最後になったが永年思い続けてきた靖国神社参拝が、ちょうど戦後五十年の記念すべき年に、現在お世話になっている会社の本社表彰に招かれたため、実現出来、やっとほっとしているのである。

私の軍隊体験記（満州）

愛媛県 越智 壽

私は、大正八（一九一九）年二月二十日に生まれた。愛媛県西条市の本籍地にて、昭和十五（一九四〇）年二月十日、現役兵として徳島歩兵第四十三連隊留守部隊に入営、早速軍服に着替えたのだが、我々の服は新しい服、隣の班は古い服であった。そして、古い服の兵隊は内地勤務であり、新しい服の兵隊は満州行きであった。一週間後いよいよ満州へ出発である。徳島より列車で坂出まで行き、民家に分散して一泊。私は医者の家へ泊めてもらったが、大層もてなしてもらったことを今でも忘れない。

坂出港より約二、〇〇〇トンの汽船で、瀬戸内海は静かな波であったが、途中玄界灘では波が大きくうねるので、ほとんどの兵隊は船酔いをして、食事も口に入れず「ゲーゲー」と吐いていた。二月二十三日朝鮮